

人生いろいろ

鈴井 江三子

三宅医院(岡山市)

先日久しぶりに、昔一緒に働いていた看護婦さんに会った。以前から持っている卵巣腫瘍が痛みだしたため、私が勤務する医院に診察に来たという。微熱も2週間ほど続いているようで、化粧つけない顔とけだるそうに動く様子から、彼女が職場を去ってからの歳月の長さを感じた。

彼女に初めて会ったのは今から13年前である。当時19歳の彼女は、准看護婦として就職してきた。面接当日の、からだにフィットした服と、首に巻きつけてある金の鎖が印象的であった。就職して間もなく、高校時代から付き合っていた彼と結婚し、すぐに男の子が生まれた。はたちの母である。年が若いせいもあってか、お酒落が好きな彼女は子供が生まれたからといって決してみだしなみに手を抜くことはなかった。もともと派手人間が大好きな私は彼女と気が合い、夜勤などで一緒になると朝方までよく話しこんだものである。

そんなある日、彼女は二度目の妊娠をした。姑と性格が折り合わず、ひとつぶだねの子供を残して婚家を出た直後であった。生活の基盤もなく経済的に不安定な彼女は、その時何度か妊娠をあきらめかけた。しかし、家族を失った寂しさからか、「離婚をしたとはいえ、彼の子供に間違いないので、上の子供のためにも産みたい」とつぶやいていた。結局胎児は、母親の立場を察したのか、育つことなく流れていった。流産の処置をした後、次は元気な子供が産みたいと笑ったのを覚えている。

彼女が三度目の妊娠をしたのは、それから3年後のことだ。昼休みに休憩室でだるそうに寝そべっていた様子から、彼女の妊娠を知ることとなった。相手は結婚している人とのこと。結婚ができ

る状況でもないのにどうして子供を欲しがるのか私には理解できなかった。私はまさに「問いただす」口調で、私生児を抱えてひとりで育てるのはいかに大変かを強調し、考え直すことを勧めた。

周囲の「忠告」に勝てなかった彼女は中絶をし、その後間もなく、看護婦以外の職種につきたいと願い出て退職していった。それ以来彼女のことは考えなくなかった。気まずさだけが残っていた。その気まずさがどこから来るものか、その時はわからなかったし、わかろうとしなかった。今回、手術のために入院してきた彼女と再会し話をしなかったら、あのときの気まずさは消えなかったに違いない。

彼女いわく、「三度目の妊娠をしたとき、つわりがひどくって食事も満足にとれなかった。誰にも言うことができないまま3か月がたった。妊娠がばれたのは、ちょうどそんなヘトヘトの時期だった。もう少しつわりが軽くってからだが楽であれば何とかなったと思うけど、その時は頭が回らなかった。だからもう少し考えたかった」そうである。わが子の命を断ったことを悔やんだ彼女は、命の誕生をケアする仕事をやめた。

あの時、私のしたことはいったい何だったのか。確かに彼女は、子供をあきらめることで経済的に困らずに済んだ。しかし彼女の心は満たされなかったのである。つまり他人が、世間の常識という枠の中に彼女を閉じ込め、彼女自身の生き方を選択させたのだ。たとえ結果が同じであっても、本人が選ぶべきものであった。

人にはそれぞれの人生がある。「人の道」と称して、自分の価値観を押しつけるのはもうやめようと思った……。